

平成 28 年 10 月 11 日

キャリア教育方法論の新たな視座

－建学の精神とキャリア教育－

学校法人 東筑紫学園
キャリア教育推進支援センター長
九州栄養福祉大学 兼任講師

中村 吉男 著

九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学
キャリア教育推進支援センター

目 次

| | |
|--|----|
| 1. 建学の精神「筑紫の心」概説 | 1 |
| ー日本文化史及び精神史の視点からの検証ー | |
| 2. 「筑紫の心」各論 | 5 |
| 1) 勇気・親和・愛・知性の4つの芽（心） | |
| 2) 国を愛し労働をいとわず | |
| 3) 親や祖先をあがめ | |
| 4) 己をむなしくして社会に奉仕する | |
| 5) 心の畑をむしり肥料をつちかい新生する芽を伸ばしていく | |
| 6) 教育とは心の畑を耕すことでもあります | |
| 7) 3つのポリシーを中心にした教育課程における質保証システム | |
| 3. 「建学の精神」概説 | 9 |
| 1) 「宇宙の根源をなす神の意志を以て心とする平和理念に基づいた教育を根本方針として | |
| 2) 「心・技・美、一如の実際に即した専門教育を授け」 | |
| 4. 「和」と「礼」の文化（日本文化）史的視点から見た建学の精神 | 12 |
| 1) 茶道と武道 | |
| 2) 華道 | |
| 5. 普遍性を持つ教育理念としての総括及び検証 | 14 |

1. 建学の精神「筑紫の心」概説

－日本文化史及び精神史の視点からの検証－

本学園では、専門教科教育と並んで、建学の精神に基づく人格教育とキャリア教育を行事教育の柱として、教育課程内外に亘って推進している。

本学園の建学の精神は、日本民族の国民性に深く根ざす古神道でいうところの大和の心（随神の道）^{かんながら}をその根底においているのが特色である。

もとより古神道は、日本人が直感的に捉えた宇宙観人間観そして世界観を神話（神物語）として、展開し、それが日本国民の国民性及び国民精神そして独自の日本文化を形成している原点となっているものである。

本学園の建学の精神の中にある勇氣・親和・愛・知性の基となっている古神道でいう一霊四魂の展開こそが日本精神の原点でもある。

すべての人に宿る一霊四魂（古代から男は日^ひ子^こ・女は日^ひ女^めと呼び、いわゆる神の霊を宿す神の御子とした）を互いに尊敬し（自敬と他敬）、何事も「礼に始まって礼に終わる」礼節を重んじる心、あらゆる宗教や精神文明そして科学技術物質文明を受容し、そして、それらを調和せしめながら進歩発達を促す包容性と創造性（日本にはあらゆる宗教が争いなく共存しそれぞれ発展している、また西洋科学技術を中心とする物質文明を受け入れ世界最高の科学技術を発展せしめている）の心を重んじてきた。これらの相互尊敬の心やすべてを包容する親和（和魂）の心、そしてすべてを生かす愛（幸魂）の心が真の世界平和の礎となる心でもある。

そして、あらゆる人間の仕事や働きを道（随神の道）の文化（華道・茶道・武道・相撲道・医道・芸道・書道等）に昇華させる精神、罪穢れを忌みそれを清める清明心、全体の秩序調和を重んじる公共心、桜の花に象徴される執着を嫌う無我献身の美德、これらを総称して大和魂（大和心）と呼び、日本人の特性として培われてきたものでもある。

随神の道は、仕事に愛（魂）を込めることで、道の文化を形成したが、本学園では、これを「労働をいとわず」と表現している。「仕事に感謝し、そして、いのち（魂）を込める」ことである。これは、又、キャリア教育の原点になるものである。

更に、仕事を通して社会に奉仕する心（社会的使命感）は、仕事に愛（魂）を込めることと相俟って、仕事上のストレスコントロールの要ともなる。又、仕事への熱意や主体性の原動力ともなる心である。

本学園では「己をむなしくして社会に奉仕する」と表現されているものである。

本学園の建学の精神は、相互礼拝そして相互感謝の心を養うことを眼目とする。本学園の創設者宇城信五郎先生は、本学園の教育目標として「本校の教育方針は感謝の人となり得る人間を作ることにあると言えます。（昭和43年「東筑紫学園通信」より）」とあるように、何人に対しても又、何ごとに対しても感謝のできる人間の教育を第一義においている。

感謝の心は、自らを生かしている天地万物に対する感謝があるが、本学園ではその象徴的行事として大学と短大では「食物感謝祭」と「針供養」の行事がある。

しかし、感謝の中でも、親や祖先に感謝する心は、昔から「親孝行は百行の基」と言われるように、人間にとって、最も重要な「報本反始」^{ほうほんはんし}（人が天地や祖先など存在の根本に感

謝し報い、発生のはじめに思いを致すこと)の心の原点となる。本学園の建学の精神には「親や祖先をあがめ」と表現されている。

また、親だけでなく社会や国家の恩も知らなければならない。人間は、先ず生かし合いの中で生きている社会的存在であり、社会国家の恩恵の中で生かされている存在でもある。「国を愛し」と建学の精神では、表現されているが、社会国家の恩に対する感謝の心を持つ意味である。

この感謝の心は、物事を前向きに建設的に、そして肯定的に捉える心でもあり、又、それは、究極のストレスコントロールにもつながる心でもある。

更に本学園では、人間の中に宿る、一霊四魂が、利己的な心や間違った欲望で曇らされる(これを古代日本人は罪穢つみけがれとした)、罪は「包む(一霊四魂の本体が包み隠される)」を語源とし、穢れ(汚れ)は「気が枯れる(本来の一霊四魂が枯れる)を語源とする。

そして、本来の清浄無垢なる一霊四魂を覆っている罪穢れを清める「禊祓みそぎはらい」を重んじたが、本学園の建学の精神では、「ともすれば草を生い茂らせ狭隘にして瘦せ細りがちな心の畑の草をむしり肥料を培い新生する芽を伸ばしていくところに教育の使命があります。」と「禊祓」の働きを現代的に表現している。

「新生する芽」とは、神の本性としての一霊四魂の芽を如何に育むかということである。

ここに本学園の教職員は、学生生徒園児に対する教育上の基本的姿勢が示されている。すべての子供の本性を神性(一霊四魂)を宿す神の子として尊敬する事から出発し、その本性として内在する四魂(愛と親和そして、その愛と親和の心によって導かれる勇氣と知性の心)をいかに引き出すかである。

その四魂の引出しは、言葉の力による。それは、認める言葉であり、褒める言葉である。

ちなみに、神話の中のイザナギの命みことが夜見よみ(死者の国)から逃げ帰ってその穢れを浄めた所(川の中瀬)が「筑紫つくし」の日向ひむかと呼ばれる場所で、本学園の校名になっている。「筑紫」は元々「尽くす」を語源として、「尽十方じんじっぽう」の広がり、即ち「大宇宙」を意味している。その大宇宙は、同時に「日向」、即ち日(太陽を象徴—神話では「天照大御神」として現れる)を中心として、その光が大宇宙に広がる様を表している。

これは、大宇宙の姿であると同時に、人間の四魂が現れたときの姿でもある。それは、世を照らす光であり、人々を生かし照らす光である。それは、愛の光であり知恵の光でもある。しかし、自らを輝かすのではない。世の中と他の人々を生かし照らすときに光となるのである。

本学園では、その魂を清める象徴的行事として、「お掃除」を行っているのである。お掃除は、他の人そして、全体のことを思う心を養うことでもある。人間の共存共栄の生かし合いの世界の自覚と、他を思いやり全体の調和を思う「和魂」と「幸魂」を磨く行事であり、「公の愛」と「隣人への愛」を磨くことになる。特に、「感謝の行としてのお掃除」に関しては後述する。

本学ではこの「和魂」を「親和」の心とし「幸魂」を「愛」のこころとしている。これは、キャリア教育でいうところの「コミュニケーション能力」の原点ともなる心である。

組織は、「協力」「協調」そして「協働」が必要である。組織目標を共有し、組織がその目標達成に向けて一体となって進むとき真に強い組織となる。

また、特に汚いトイレの掃除では、「勇気（荒魂）」も必要である。小さい勇気かも知れないが、他や全体を思いやることの中で培われるこの小さい勇気の積み重ねが、人類社会に貢献するためには「千万人といえども我往かん」という精神を養う基ともなるのである。

「奇魂」は本学園では「知性」として表現しているが、これは、専門知識を習得するだけでなく、一霊四魂の一つとして、本来、神の叡智に根差したものである。他を包容しすべてを生かす和魂（親和）と幸魂（愛）の徳に基づく知性であって初めて人類社会に貢献できるものとなる。利己心や欲望に根差した知性は人類社会を破壊するものに転化することになりかねないからである。

それ故、四魂は和魂や幸魂を先導役として奇魂と荒魂が調和して発達する必要がある。それと同時に、「己をむなしくして（無我）社会に奉仕する」心が、四魂の調和と魂の進化発展をもたらすことになる。本学園における専門知識と技術の習得は、このような人間形成の理念を基におこなわれることになる。

しかし、この理念は、本学園のみならず、人類の普遍的な人格教育の原理でもあろう。

そして、その四魂の発達調和の目指すものは、人間個人の成長であり、同時に国家社会及び人類社会の進歩向上発展である。そして、究極の人類社会の平和の実現である。

以上が、本学園が目指す建学の精神に基づく教育理念及び教育目標であり、ミッションである。

最後に、本学園の代表理事であり、九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学の学長である室井廣一先生の「お掃除門—宇城信五郎の教育思想」の中の「感謝の行としてのお掃除」の一部を抜粋して、この章の締めくくりとしたい。

「創設者はなぜ感謝を人生の基礎、本校の教育方針とまで考えたのか。平凡でありきたりのような言葉であるがこの言霊には強力なエネルギーが秘められているからである。先生は「微笑幸福の門」が感謝の喜びによって拓かれると強く確信していた。ではなぜ感謝の心にはそのような力が潜んでいるのか。ここのところが本当に重要なのである。両親、祖先、自分を育ててくれた故郷の山川草木、お世話になったすべての人々、毎日我々を生かしてくれている食物、我々を黙々として支えている大小さまざまな道具・生活必需品、このようなさまざまな何気ない存在の支えがあって我々は生かされている。本当のところ我々は生かされながら生きている。そういう我々の生活実学の連なり実体を心の奥底から実感した人は感謝の念がこみあげてこよう。貧困や飢え、病気、事故、死亡といった不幸のなかで、とにかく元気で生きているのは、そういう何気ない存在の体系の「お陰」ということを考えれば、心ある人なれば誰でもこの感謝の念が湧き上がるはずである。

ではなぜそれが大切で尊いのか。そこに「有り難い」という謙虚な心が発生するからである。正確に言うと喜びに満ちた謙虚な心が発現してくるからである。霊妙な心の実存とっていい。喜びの入った謙虚な心ということをここではよくよく噛みしめてもらいたい。人は本当にこの心と出会った時、それこそ創設者のように天を仰ぎ地に伏して感泣するのである。自己の人生を呪い、人を恨み、物に当たってきた自分の傲慢さに気づく。はじめて自分の心の緊張を解放する方法を知る。微笑幸福の門に一步近づくのである。感謝の念はこのように自分の心を謙虚に洗い清める力を持っている。最高のお掃除と言っている。

四魂を磨き発達させるお掃除力を秘めている。本学が目指す「己を空しくして社会に奉仕する人間像」で言う奉仕の力の具体的醸成基盤をなす。

…中略…

そうしてこういう日常実践の積み重ねの上にはじめて本学の「己を空しくして社会に奉仕する人間像」が目指す奉仕の心・力が着実に醸成されてくる。奉仕の力などというのは、以上述べてきたような、常に欲望的に部分化し縮小化しあるいは傲慢肥大化する「心の畑の蠹^{うごめ}き」を磨きに磨き練りに練り殺しに殺して創り上げるという日常的着実な行を積みまなければ到底物にすることは出来ないのである。本当の自分の根源の光など欲望やストレス等のごみだらけのなかに輝きだすはずがないのである。まして自分に与えられた天地宇宙の使命・ミッションの創造実現など及ぶべくもあるまい。」

本学園は、日常的感謝の心を育み、魂を清める象徴的实践行として「お掃除」を行うのである。本学園の人格教育の根底の一つにこの「お掃除」を置いているのは、毎日の「禊祓」の行として、調和した四魂を磨きだし、日常的に四魂を発動し人格を陶冶するためである。

仕事を通じて社会に貢献する人材を育成するキャリア教育も、この普遍的な教育思想を根底とする本学園の建学の精神に基づく人格教育を核として行うものである。

以上は、「筑紫の心」の概説であるが、更に、その「筑紫の心」を6つに分け、以上の内容を、より分かり易く以下にまとめる。

2. 「筑紫の心」各論

1) 勇気・親和・愛・知性の4つの芽(心)

この「筑紫の心」における、この4つの心は、元々、日本の古神道(随神の道)における人間の捉え方(一霊四魂;「荒魂」「和魂」「幸魂」「奇魂」)を根底にしたものである。一霊とは神の御子としての人間は、神の霊の分け御霊(直霊)を宿し、その霊は四魂(4つの心の働き)として内在するという人間観である。

西洋では、「知情意」として心の働きを3つに分けているが、その「情」を「愛」の感情と考えれば、日本人は、「愛」を「幸魂」と「和魂」の二つに分けているところに、何よりも「和」と「秩序」を尊重する独特な国民性を生み出す特色があるといえる。

又、日本における、あらゆる道(武道・芸道・茶道・華道・書道等)には「礼に始まって礼に終わる」という礼儀を重んじる気風があるが、礼儀を重んじる国民性は、人間を神の御子(男は日の御子=日子、女は日の女=日女と呼んできた;日は霊であり、天照大御神の御神霊を指す)として、自他を尊敬する心から生まれてきたものであり、国民性の基盤をなす伝統的精神である。

○「勇気」は「荒魂」で、元々は「現身霊」であり、神霊が身体として現れたものとして(それ故、本学園の創設者である宇城信五郎先生は人間を「神の子」そして身体を「神

の宮」と表現されている)が、心は、肉体的活動を伴うものであり、人間の積極性・主体性が肉体的行動に転化発動していく心の働きと捉えることができる。

但し、この「荒魂」も、次の「和魂」や「幸魂」そして「奇魂」に導かれなければ、蛮勇となったり、自己や他者破壊に転化したりすることもある。

又逆に、四魂の中の「和魂(親和)」や「幸魂(愛)」を実践するには、「荒魂(勇気)」が必要である。

親和の心と愛の心の実践であり感謝行としての一つに、他人が汚したトイレのお掃除も少しではあるが勇気が必要である。勉学(実習)でも人間関係でもまた仕事でも、厳しい状況に立たされたとき、それから逃げないことも「勇気」が必要である。

新しい未知の分野に挑戦することも「勇気」が必要である。また、公正と正義を貫くことも「勇気」が必要である。

更に、愛も親和の心も又知性も、それらが調和して、国家及び人類社会のお役に立つためには、「孟子」にある「自ら反(省)みて縮(直)くんば、千万人といえども吾往かん(自分の心に一点の私心私欲もなく、自ら信じることを行うことが、多くの人々そして国家や人類社会に貢献することであるならば、たとえ、千万人の人が、批判や非難を自分に浴びせようとも、自ら信じる道を行くという意)」という真の勇気(荒魂)を必要とすることもある。

- 「親和」は、「和魂」で、全体の調和や秩序を重んじる心の働きを表したものである。人間の公共心(公共の福祉を優先する心-J・J・ルソーの唱えた「一般意思(公共の利益を考える意思)」に通じる心ともいえる)の原点ともなる心であり、差別と争いなきそして全体の利益(福祉)を考える世界平和の原点ともなる心である。

この心は、人類への、そして社会国家への「公の愛」ともいえる。この「和魂」は、古来から「大和魂」と呼ばれ、又、聖徳太子が一七条憲法の第一条で「和を以て貴しとなす」と「詔」されたところの心である。

それは、すべてを受け入れ(受容する)心である。この心は、次の「幸魂」や「奇魂」と調和して、すべてを受容するだけでなく、そのすべてを愛と知恵で生かす(大包容)の心となる。

- 「愛」は、「幸魂」であり、祖先から受け継いできたところの(幸はえられたところの)生命を自覚し、親や祖先の恩に感謝し、親や祖先を敬う心の原点ともなる心であり、家族への愛を中心とする心である。

又、惻隠の情(「孟子」)や慈しみの情(「仏心とは四無量心是なり」の4つの仏の心の中の「慈悲」の心)そして、隣人への愛(ヨハネ福音書「人その友のために己の命を棄つる、之より大なる愛はなし」)の心を包摂するものでもある。

但し、この「愛」は執着の愛にならないように気を付けなければならない。幸魂は和魂や奇魂(知恵)と調和して「信じて(信頼して)放つ愛」へと昇華する必要がある。

○「知性」は「奇魂^{くしみたま}」であり、頭腦的な専門的知識や分析知等を指すだけでなく、本来、一霊（神の霊）に基づく叡智に根差した、人類を生かすところの「知性」である。それ故、「知性」は、「和魂」や「幸魂」に導かれる（調和する）必要がある。「知性」が私利私欲に導かれると不調和の原因ともなり争いの世界が現出することにもなり兼ねない。

また、四魂が調和して発動される「知性」には、内面から「知性美に輝く」と表現されることもある。

2) 国を愛し労働をいとわず

「国を愛する」とは、上記の「和魂（親和）」の心からもたらされる「公の愛」を根底に置いたもので、社会国家の恩に対する感謝の心を根底に置いた心である。

「労働をいとわず」とは、仕事に愛（魂）を注ぐことをいい、この心は、そのまま次の「己をむなしくして社会に奉仕する」心へと繋がる。

仕事への熱意であり、仕事をする上でも最も求められる心の姿勢である。これは、四魂が発動すればするほど、高まるものであり、本学の人格教育及びキャリア教育の根底ともなる心である。

3) 親や祖先をあがめ

これは、上記の「幸魂」から自然にもたらされる心であり、人間を生かしている天地万物そして国家や人類社会の恩恵に感謝することは当然である。また、勉学に励むことができるのも、又、仕事をさせて頂けることにも感謝は必要である。

しかし、それよりも何よりも、親や祖先の恩に対する感謝の心が最も大切である。今日まで育てて頂き、今、ここに、自分があるのは、すべて親や祖先のおかげであることを思えば、親や祖先への感謝の思いを持ち続けることは、人間の最高峰の感謝行（徳行）と言っても良い。「親孝行は百行の基」と言われる所以である。

恩を知る心は、信義を重んじる心の原点であり、人間社会の法及びあらゆる活動の原点でもある。

本学では、その感謝の心を養う象徴的な日常実践の行として、又、愛や親和の心を磨く（魂を清める）行として「お掃除」を行い、「お掃除教育」を重要な人格教育の根底においている。

4) 己をむなしくして社会に奉仕する

これは、無我献身や無我奉仕の心を養う重要な人格教育の核となるものである。

調和のとれた四魂の発動は、仕事への愛（魂）を込める心へと、そして、社会への奉仕（社会への貢献）する心へと進化し、人類社会全体の発展向上進歩へと繋がる心である。まさに生かし合いの心であり、感謝の心の表れでもある。

しかし、一霊（神の霊）によって、調和のとれた四魂が成長するためには、私心私欲が昇華されていく必要があるが、そのための一つの行として、日々「己をむなしくする」ことを心掛けることが必要である。

己をむなしくするとは、利己的な全体のことを配慮しない心に基づく言動などで、一霊四魂が曇らないようにすることである。

そのような言動を自ら省みて、私心私欲があれば、それを捨て去り、社会国家全体のこと（和魂）を思い、そして、すべてを受け入れすべてを生かし（幸魂）人類社会全体に奉仕する心を磨くことによって、内在の一霊四魂と結びつく心の実践が必要である。

この己をむなしくする行は、次の、古神道における精神の「禊祓^{みそぎはらい}い」に通じるものである。

5) 心の畑をむしり肥料をつちかい新生する芽を伸ばしていく

以上述べてきた心（筑紫の心）は、ともすれば草を生い茂らせ、そのまま痩せ細ることにもなり兼ねない。日々我が身を省みて、本来人間に内在する一霊四魂を曇らさないように、そして、それをさらに磨きだすことを心掛ける必要がある。

古神道では、これを「禊祓^{つみけがれ}い」といって、罪穢（罪は「包む」を語源とし、本来の正常な四魂が包み隠されることをいい、穢れは「気が枯れる」を語源とし、「気」即ち一霊四魂が発動しなくなって枯れることをいう）を祓い、浄める行である。

一霊四魂は、往々にして、人間の利己的・自己本位的我欲で曇らされることがあるので、わが心と行動を日々省みて「私心私欲」の言動がなかったかを省みつつ、魂を清めていく（「一霊四魂」という新生する芽を伸ばしていく）必要がある。

四書五経の中の「大学」にいう「日に新たに、日に日に新たに、又、日に新たなり」である。本学のお掃除教育及び人格教育の原点となる行であり教育思想である。

本学園の「筑紫の心」で、仕事を行えば、それが医者であれば「医道（医は仁術なり）」となり、詩を読めば「歌道（短歌は古来から敷島^{しきしま}の道と言われる）」となる。

そして、仕事全般で言えば「仕事道」となる。

6) 教育とは心の畑を耕すことでもあります

建学の精神に基づく人格教育の方法論として「子どもの心の畑を耕す」には、悪いという表面に現れた姿をそのまま認め、それを矯正する（芽を摘む・刈り取る）のではなく、先ず、すべての子供に内在する神性としての一霊四魂を認めることである。

そして、それを尊敬することである。これは、カウンセリングにおける「来談者中心療

法」を提唱したカール・ロジャーズの「人間尊重＝無条件の絶対的尊重」の精神とも通じるものである。そして、親和（大包容）の心で、すべての子どもを受け入れ（「来談者中心療法」の「受容」とは、良い感情だけでなく、通常受け入れがたいと思うような悪いそして恐ろしい感情さえも無条件で受け入れることである）、その上で、どうしたらその子どもを生かすことができるか（幸魂で）を考える（知恵）ことである。

そこからおのずとその子の良さや、その良さ（一霊四魂に根差す）を引き出す最もふさわしい方法を見出すことが可能となる。

その時、重要な要素となるのは、やはり「言葉の力」である。教師の深い信頼に裏付けられた（その子の本性に対する信頼である）言葉は、子どもの自己信頼を高め、そして、意欲を高めることになる。「他敬（教師による）は自敬（学生生徒自身の）を養う」のである。

この教育方法論は、学生生徒自身がお掃除を通じて、また、自省等によって魂を浄める方法ではなく、教育者が学生生徒園児に行う教育方法論であることに注意する必要がある。

7) 3つのポリシーを中心にした教育課程における質保証システム

以上の「筑紫の心」を本学の行事教育における人格教育の核とするだけでなく、この人格教育を根底に置いた専門教育そして、キャリア教育が行われなければならない。

特に大学と短大及び大学院においては、そして又、この建学の精神に基づいた教育理念と目標が、3つのポリシーとして展開し、教育課程（教育過程）における一貫した内部質保証システムとして構築されなければならない。

そのために、PDCA サイクルにおける検証が、それぞれの部署・組織で毎年行われるだけでなく、客観的な内部評価及び内部監査システムとしての IR（教学だけでなく、財務や経営全般を含む）、そして、外部評価（第三者評価）としての認証評価（外部の厳しい目が入ることは重要である。できれば3年か4年に一回は行うことで、より教育の改善意識が組織的に内面化することの実質化を図ることがより可能となる）が組み込まれ、学生の質の保証を担保しつつ、地域社会及び人類社会に貢献し得る人材の育成が行われなければならない。

3. 「建学の精神」概説

上記の「筑紫の心」は、現在、本学園の建学の精神の中核をなしているのであるが、この「建学の精神」とそのまま名づけられたものは、本学園の短期大学創設の時に作られたものである。

以下「建学の精神」に関する解説と検証を行う。

「建学の精神」（前文）

「本学は宇宙の根源をなす神の意志を以て心とする平和理念に基づいた教育を根本方針とし、学長自ら堅い信念と、強い実践力を以て其の陣頭に立ち、高い教養と豊かな情操を養い、心・技・美、一如の実際に即した専門教育を授け、心身共に健全にして、人類社会の

福祉に貢献できる人材を育成することを建学の精神としている。」

1) 「宇宙の根源をなす神の意志を以て心とする平和理念に基づいた教育を根本方針とし」

この内容を、古神道的に解説すると、古事記神話では、次の文から始まっている。

「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神、此の三柱の神、みな独神成り坐して、身を隠したまいき。」(天地の初発の段)

これは、我が国の古代民族が、宇宙の成り立ちと、その宇宙生成の展開過程をどのように捉えたかがわかる内容である。

先ず、高天原の「高」とは、高く伸びる象徴であり、線で表すと「縦の線」であるが、時間的に言うと、いのちの縦の連続を表す。「天」の「あ」は言霊的に解釈すると、「顕れる」である。「ま」は、「まるい」であり、「原」は空間的に横の広がりを表す。「あま」で、「まるく顕れる」となり、「たかあまはら」は「宇宙が時間的空間的にまるくあらわれる」ことを意味する。

それ故、「高天原」とは即ち「大宇宙(天球)」そのものを指す。「成りませる」は、「鳴りませる」であり、「言葉(いのち)が鳴り響く」の意となる。即ち「高天原に成りませる」とは、「宇宙創成の初めに宇宙全体に言葉が鳴り響いた」となる。

その宇宙全体に鳴り響いている神様が「天之御中主神」である。「宇宙の中心(御中)に主たる神」となり、本学園の建学の精神で「宇宙の根源をなす神」と表現しているものである。

「その宇宙創造の根源である神の御心をわが心とする」ことを本学園の教育理想の前文に掲げたのである。

その神の御心は、まるく顕れる、即ち、円満な人格、まごころとして現れる誠実な人格、それらが「まったき(全き)心」として顕れる全人格的心である。これは「和の心」と言っても良い。

当然、このような人格は人類及び世界の平和の基礎となる心であろう。そのような人格を育成することを、本学園の教育理念としたのである。

「筑紫の心」では、「親和(和魂)」を指し、公の秩序・公の福祉を重んじる大調和の心である。

それが、「建学の精神」の最後に、「心身共に健全にして、人類社会の福祉に貢献できる人材を育成することを建学の精神としている。」の内容で締めくくられることになる。

この古神道的解釈は、我が国の古代民族が直感的に宇宙の生成と創造主なる根源の神(「この神は独り神成りまして身を隠したまいき」とあるように、姿形なく、しかし、宇宙を創造したまうところの主なる神)として、捉えたのであり、キリスト教でも、このような宇宙創造の神を唯一絶対の神としている点は、同じである。

キリスト教では、「神は愛なり」としているのも、キリスト教的に言えば、宇宙の根源をなす神の意志を以て心とするとは、神の愛の心をわが心として全人格を形成する

ことになり、「筑紫の心」の「愛（幸魂）」とも一致する。

更に、その神の創造は、言葉（命）として鳴り響いていると捉えたのであるが、これは、キリスト教的に解釈すれば、ヨハネ福音書に書かれている「はじめに言葉あり、言葉は神と共にあり、これによらでなりたるものなし、これに命あり、言葉は神なりき」と同工異曲をなすものである。

「創造」は「想像」であり、「想像」は言葉によって行われることから、物事の始まりは、すべて言葉によって、展開していくものであることを捉えている。「できる」と思いコトバで唱えるか、「できない」と言葉で唱えるか、運命の分かれ道ともなる。

言葉は、想像力（創造力）を持つ故、人生を切り開く重要なカギともなる。それは、教育方法論においても、親や教育者の「コトバ」が、子どもの運命を変えることに繋がるほど重要なものとなる。

2) 「心・技・美、一如の実際に即した専門教育を授け」

通常は、「心・技・体」一如と言って、心と体と技が一体となる境地（状態）をいうのであるが、この建学の精神は、短大創設の際に作られたものであり、短大の被服科を創始としている関係から、「心・技・美」となったと思われる。

被服科における「技術」とは、即ち、「美」の創造である。「真・善・美」が、人類のところが究極に求める内容であり、それは、同時に、人間に内在する心でもある。

人間に内在する「真理」への追求心は、哲学の心であり、宗教の心でもあり、そして、科学の心でもある。この真理追求の心が、人類社会の進歩発展をもたらし、永遠に創造進化するところの心である。

学問の成立と発展もこの真理追求の心からもたらされるものであり、真理追求の心は、「知」の源泉ともなって、教育の根底をなしているものでもある。

「善」への追求の心は、人類社会の道德及び倫理の根底を形成するものであり、法の成立も、公平公正な社会の実現も、又、生かし合いの共存共栄の社会の実現をもたらす心であり、これも又、「愛」や「誠」の心や「公の心」を養う教育の根底をなすものである。

「美」への追求の心は、芸術的創造の根底をなすものであり、あらゆる人類の生活文化を高め、更に人間精神における感性を高め上げるところである。これも教育の根底をなす心である。

これらの「真」と「善」と「美」の心が一如となると、同時に、私心私欲のない心や、公平無私の心で公に奉仕する心ともなって、人類社会に真に貢献するものとなる。

本学園の建学の精神は、「心」即ち「筑紫の心（真善美の心を包摂する）」と専門知識・技術が一体となって、実際に人類社会の進歩発展（福祉）に貢献していくことを謳ったものである。

4. 「和」と「礼」の文化（日本文化）史的視点から見た建学の精神

和と礼を重んじる日本人の国民性及び文化は、「道の哲学（文化）」として、象徴的に表れて（昇華されて）いるが、この「和」と「礼」の心は、本学園の建学の精神の

根底をなすものでもある。

以下、それぞれの「道」の哲学を解説する。

1) 茶道と武道

茶道の精神は、「和敬寂静^{わけいじやくじょう}」と言われる。

茶室は、お互いが尊重・尊敬の心によって結ばれ、それは礼の心と作法（行き届いた配慮の中で一服の茶を盛る）によって和の世界を創出する。

それは、同時に静なる「寂静」の世界であり、「わび」「寂び^{さび}」の世界である。

そして、その茶室の世界は、そのまま宇宙の大調和の世界を現出する。

茶道は、禅宗との深いつながりがあるとされるが、禅宗は「無我」の境地を悟りの境地とする。

「無我」の世界とは、己を空しくして（私心私欲を去って）、すべてを容れ、すべてを生かし、そして、すべてと和する世界である。

この茶道の心に最も深いつながりを持ったのは、武士階級であったが、戦乱の中で命のやり取りを行う殺伐たる精神と思われる武士達が、何故このような全く真逆と考えられる「和敬寂静」の世界に親しみを持ったのか。

佐賀鍋島藩の山本定朝の『葉隠^{はがくれ}』武士道では「武士道と云ふは即ち死ぬることと見付けたり」と述べているが、「死ぬ」とは肉体の死のみならず、心の死即ち「自我を死に切る」ことである。

己を空しくして「自我を死に切る」無我の世界において、武士道と禅宗そして茶道との深いつながりが生まれたのである。

このような一見相矛盾すると思われる武士を中心とする我が国の国民性を、アメリカの文化人類学者ルースベネディクトは、「菊と刀」の文化と評した。

まさに、文（菊）と武（刀）との合一である。我が国では、これを「文武両道」と名付けてきたものである。

武士道について「武道の神髓」（佐藤通次・鷹尾敏文共著）より更に解説を行う。

「勇猛という字の示す如く、猛獣性は人間存在の不可欠の要素である故、これを捨て去るべきではなく、それを自覚の中に活用すべきである。その活用は、ただ他を殺すことに向かう相対的猛獣性を、自他いずれをの猛獣性をも超克する絶対的勇猛に転換することによって成^{じょう}ぜられる。故に、真正の勇猛は義のあるところに発現するのである。・・・清明心^{せいめいしん}とは、小我を捨てて義に生きる者の心境に他ならない。

・・・(中略)・・・この清々しさは、他人の猛獣性を消すことにおいてよりも、みずからの内なる猛獣性を消すことにおいて、一段と高まる。何人も、己の我儘^{わがまま}を抑えて他のために尽くすとき、この清々^{すがすが}しさを感じるであろう。『葉隠』には『勝つといふは、味方に勝つ事なり、味方に勝つといふは、我に勝つ事なり』と言い切っている。」

この「我に勝つ」というのが「自我を死に切る」ことであり、「小我を捨てて義に生きる」とは、即ち「己の心を空しくして社会に奉仕する(和の世界を創出する)」

ことである。

本学園の建学の精神は、このように武士道とも禅宗とも、また茶道ともその根底において軌を一にする哲学である。

2) 華道

何故、「生け花」が「華道」となったのか。

生け花は、「天・地・人」を基本形とする。それは、「宇宙」生成の姿でもある。種々の花は「天・地・人」の形（通常「不等辺三角形」の形）に整えられて初めてそれを鑑賞する者に美を感じさせることができる。

それは、宇宙的な調和の中に「美」を見出すことができるといっても良い。

夫々の花は、その位置と役割を異にしつつも、全体の調和の中で、生け花全体としての「美」を放つ。その時、種々の葉も枝も同じである。

全体の中で、花や枝やそして葉が、それぞれの役割を持ち（それぞれが生かされながら）全体が生きる（輝く）。全体が輝きながら、それぞれの花も輝く。

一つ一つの花は自己主張しないで全体の調和の中で生きているのであるが、全体の調和の美の中では、それぞれの花の個性も逆に生きている。

これを人間社会に置き換えれば、他者実現の働き（社会国家全体の福祉の実現の働き）の中で、真の自己実現も完成するといっても良い。

これは、キャリア教育の基本ともなるものである。

このような全体と個が同時に生きる（輝く）ためには、花を活ける（花を生かす）者の心に、全体の調和の心、即ち、全包容の和の心と、それぞれを生かす（活かす）心が養われる必要がある。

花を活ける者自身が、他を敬い、そして、他を生かし、和を重んじ、己を空しくして社会に奉仕する心が養われることによって、初めて、大調和の世界（真の「生け花」の世界）が創出されることになる。その時、「生け花」は、人間自身の人格形成の「道」となる。

それ故、活けられた花に向かって、その鑑賞者は、先ず礼をすることから始まるのである。更に、活けた人に対しても敬意を表して礼をすることになる。

武道も茶道も、すべての道が、「礼に始まり礼に終わる」所以である。

我が国の国民性として、世界が称賛する「礼儀正しさ」も、他敬と和を重んじる心から生まれるのである。

5. 普遍性を持つ教育理念としての総括及び検証

教育の目的において、人格の完成は、一つの標語とさえなっている程一般化された言葉であるが、それに比して、この人格の完成というものの内容に関しては、未だ明確ではないのが事実である。

先ず、何を以て人格の完成というのか、であるが、それに関しては、今まで、本学の建学の精神の検証の中で、色々の視点から述べてきた中に、すべて含まれている。

簡潔にまとめると、人格の完成とは、「大包容力」であろう。しかし、何度も述べてきたように、包容し（受容し）、そして、すべてを生かすものでなければならない。そのすべてを生かすためには、幸魂（愛）と、そして奇魂（知恵）が必要である。その知恵とは、人を生かすための人事処に応じた（人に応じ事に応じ時に応じた）配慮である。更に、その包容力を実践する（身に着けようとする強い意志と実行力）荒魂（勇気）が必要である。

真の和魂（親和）の発現には、以上のように、四魂が調和して初めてその完成に近づくのである。

それを身に着けるための修行として禊祓い（心の雑草を刈る）をすることによって、魂を清める必要がある。それは、私心私欲を去って、公に殉じる（奉仕する）気持ちで、仕事に従事することである。

更に、本学では、その禊祓いの象徴的行として「お掃除」を感謝の気持ちで行うことを奨励している。

以上の内容は、古今東西どのように表現されようが同一の内容でもある。

夏目漱石が「則天去私」と言い、西郷南洲翁が大西郷遺訓の中で「人を咎めず、天を相手にせよ、天を相手にして、己の誠の足らざるを尋ぬべし」といい、「敬天愛人」を座右の銘としたことも、又、京都セラミックの稲森会長が、第2電電を立ち上げるとき「動機善なりや、私心無かりしや」と自らに半年にわたって問い続けたことも、茶道において「和敬寂静」と表現し、禅宗が「無我」を説き、中国の道教が「無為自然（雑念妄想を捨てて計らい心を捨ててそのままの自然の心境に生きる）」を説くも、みな同じ心である。

ここに、本学の建学の精神及び日本の大和心の普遍性（古今東西人類誰にでも通用するもの）の本質が存するのである。

この心は、如何なる仕事においても必要な心であると共に、必然的に世界及び人類の「平和」を目指す心に結びつく。真の平和は、それぞれの個性が生きつつ（人も国家も役割と使命を異にしつつお互いを尊重することによって）、全体（国家も人類社会も）が生き、そして個も全体も「生け花」のように輝くものでなければならない。

そこに真の大調和と共存共栄の世界が展開するのである。それが、普遍性を持った「神ながらの道」である。

※敷島…日本のこと

